

啓蒙「と」教育

—その絡みと捻じれを考える—

企画：鈴木晶子(京都大学)

報告：鈴木晶子(京都大学)

弘田陽介(日本学術振興会
特別研究員)

小野文生(京都大学研修員)

司会：鈴木晶子(京都大学)

1970年代より啓蒙の終焉といわれて久しい。しかし、教育の終焉まで唱えるところに至ることなく今日に至っている。啓蒙と出自を同じくしながら、教育は自らの営みの正当性を確保すべき戦略を持ち合わせていたのだろうか？ 啓蒙と教育とのこのねじれた関係をどのように捉えたらよいのだろうか？ 私たちがいま教育近代化のはてに直面する「私たちの問題」と向き合う際に、啓蒙「と」教育の繋がりをいま一度考えてみたい、というのが今回の提案である。

教育学における優生思想の展開

—歴史と展望—

企画：藤川信夫(大阪大学)

報告：高木雅史(福岡大学)

根村直美(日本大学)

丸山恭司(広島大学)

司会：藤川信夫(大阪大学)

生殖医療技術とヒトゲノム解析に代表される遺伝学の発展を前提として、今日再び優生思想が広まりつつある。この新たな優生思想はどのような特徴を持ち、日本の教育(学)に対してどのような影響を及ぼしうるのだろうか。遺伝子組み換え人間としてのデザイナーベイビーの誕生とそれに対する教育(学)的取り組みの問題は当面はSFファンタジーの世界の事として処理することができるにしても、(オーダーメイド治療ならぬ)オーダーメイド教育に対していかなる態度を取るのかという問題については論議を開始しておくべきではないのか。

こうした問いに対する回答を見いだすためには、まずは日本の教育(学)において特に1920年代以降活発化した優生学(優環学を含む)論議との比較のみならず、諸外国における趨勢との比較も必要となる。さらに、教育(学)における今後の議論の展開を予測する上でも、生殖医療や生命倫理の分野における議論との比較が求められるだろう。

本コロキウムでは、こうした問題設定のもとで、(1)教育史の観点からは1930~40年代日本における優生学と教育の関係、(2)同じく教育史の観点から戦間期アメリカにおける優生思想の普及活動と今日のポストヒューマン・コントロール、そして(3)現代の生命倫理の観点から出生前診断を前提とした選択的中絶を巡る「自己決定権」の問題について論じるとともに、参加者の方々とともに、やがて到来するかもしれない「新優生学」時代における教育の夢/悪夢について議論を交わしたいと思う。

精神分析と教育

—エディプス・コンプレックスをめぐる—

企画：須川公央(東京大学大学院)

報告：下司晶(上越教育大学)

野見収(東京大学大学院)

須川公央(東京大学大学院)

コメンテーター：塩崎美穂(東京大学大学院)

秋山茂幸(東京大学研究員)

司会：波多野名奈(東京大学大学院)

西平直(東京大学)

精神分析と教育との関わりは、これまで主に教育(学)に対する精神分析(学)の応用という視点から論じられてきた。それは例えば、精神分析学に依拠した教育実践(S・アイザックスら)や1930年代のドイツにおける「精神分析的教育学 Psychoanalytische Pädagogik」にも見られるように、教育学の補助科学ないしは基礎科学としての精神分析学の有用性を問う一方で、他方において、精神分析学は批判理論や反権威主義教育との関わり合いを通じて、従来の教育(学)批判の理論的典拠としても援用・議論されて今日にまで至っている。

本コロキウムでは、教育「目的」を達成する(もしくはそれを否定する)「手段」としての精神分析学という、従来のそうした「精神分析と教育」理解に一矢を放つべく、精神分析と教育との内的な構造的連関及びその差異を明らかにするところからまず議論を開始したい。その際、我々が共通のテーマとするのは「エディプス・コンプレックス」である。当日は、まず「精神分析におけるエディプス・コンプレックス理論の変遷」(下司)を追うことから始め、それを主に「教育関係論の視点から考察」(野見・須川)していきたいと考えている。

